上代日本語の動詞の用法

――動詞連接の意味的な分属と反義語の連接――

佐佐木　隆

一

古代日本語、特に上代日本語の「複合動詞」が示すさまざまな構文上の現象は、かつて議論の対象になることが多かった。[1] しかし、最近ではそれが正面から取り上げられることはほとんどない。多方面にわたる従来の議論によって、「複合動詞」にかかわる多くの事実が明らかになり、あえて議論すべきことがなくなった、ということだろうか。

実際の文に現れる「複合動詞」は、「動詞Aの連用形＋動詞Bの諸活用形」の形式に一般化することが可能である。上代語のこの形式に関して指摘されたことの一つに、次のようなことがある。この形式を構成するA・B二種の動詞は、後世語で同じ形式を構成する二種の動詞よりも、意味的な結びつきが緩かっただろうということ、言い換えれば、A・Bそれぞれの意味的な独立性がより強かっただろう、ということである。それが妥当な推定だとすれば、上代語には後世語の「複合動詞」のようなものはまだ存在しなかった、と考えなければならない。

確かに、そのような推定を導かせる構文上の現象が、上代語にいくつか認められる。『萬葉集』の歌を見ると、た

とえば、「帰り来」に対して「変毛来哉常（帰りも来やと）…」〔十三・三一三二〕があり、「立ち上る」に対して「立者不上（立ちは上らず）…」〔七・一二四六〕があり、「恋ひ暮らす」に対して「恋其晩師之（恋ひそ暮らしし）…」〔十二・二八四一〕がある。これは、A・B二種の動詞の意味的な関係が緩かっただろうという推定を導くに足る、最も典型的な現象である。そして、「か」「や」「そ／ぞ」「し」「も」「は」など広義の係助詞を含む［動詞Aの連用形＋係助詞＋動詞Bの諸活用形］という形式が存在した事実は、それを含まない［動詞Aの連用形＋動詞Bの諸活用形］という形式の場合でもA・B間の意味的な関係が緩かっただろう、だからこそ間に係助詞が位置しえたのだろう、という推定を導くのである。現代語の「複合動詞」では、動詞間の意味的な結びつきがより強くなっており、係助詞に由来する助詞が二種の動詞の間に位置することは、原則として許容されない。

『萬葉集』全体では、単独の係助詞が動詞間に位置する例だけでも一〇〇を超えている。それのみならず、「手折来而（手折り来て）…」〔八・一五八九〕に対する「手折曽我来師（手折りそ我が来し）」〔八・一五八二〕では、係助詞「そ」だけでなく主語の「我が」までが動詞間に位置している。同種の構文の例はほかにもいくつかある。動詞Aが、あとに動詞Bがくることを前提にして連用形という形態をとってはいるが、一方ではAとBとの意味的な関係が相当に緩いものだった、ということを物語る。あるいは、動詞Aの機能は連用形中止法に近いものだったろう、と想定することさえ可能なのではないか。

従来たびたび指摘されたように、禁止を表す副詞「な」の用法も、動詞間の意味的な関係が緩かったことを示唆する。たとえば、「大夫の思和備乍（思ひ侘びつつ）…」〔四・六四六〕に対して、「な」を含む「国遠み念勿和備曽（思ひな侘びそ）」〔十二・三一七八〕があり、「梅の花知利麻我比多流（散り紛ひたる）岡辺には…」〔五・八三八〕に対して、同じく「な」を含む「暫しくは落莫乱（散りな紛ひそ）」〔九・一七四七〕がある。

さらに、「相ひ別る」「取り見る」などに用いられた「相ひ…」「取り…」や、「恋ひわたる」「忘れかねつも」などに用いられた「…わたる」「…かぬ」に関しても、前後にある動詞との意味的な関係について同様のことが想定される。こうした用法の動詞は、古語辞典の類では接頭辞・補助動詞として扱われている。しかし、「安比加和可礼牟（相ひか別れむ）」〔二十・四五一五〕や「恋也将渡（恋ひやわたらむ）」〔十・一九八九〕などのように、これらの補助的な機能をもつ活用語と根幹的な意味を表す動詞との間に、係助詞が位置する例も少なくない。補助的な機能をもつ動詞もまた本来の意味を濃厚に保持しており、後世のものよりは意味の面で独立性が強かったようである。

ただし、「在曽金津流」〔四・六一三〕や「日月は……照哉多麻波奴」〔五・八九二〕のように、本動詞と補助動詞との間に助詞が位置する例はあるが、前者の補助動詞と助動詞との間に助詞が位置する「有りかねそつる」というような例は皆無である。この事実は、既に助動詞は直前の活用語と意味的に密接に結びついていたことを示す。

『萬葉集』の歌には、「飛翻来鳴令響（飛び翔り来鳴き響もし）…」〔九・一七五五〕や「宇知嘆之奈要宇良夫礼之努比都追（打ち嘆き萎えうらぶれ偲ひつつ）…」〔十九・四一六六〕のように、五種の動詞の続いた表現がある。これらもまた、当時の動詞は緩い関係で重なっているにすぎなかったのだろう、と想定させる。『続日本紀』所載の宣命や『延喜式』所載の祝詞などの散文にもまた、「聞食驚伎悦備貴備念久波（聞こし食し驚き喜び貴び思はくは）…」〔十二詔〕や「待防掃却言排坐弖（待ち防ぎ掃ひ却り言ひ排け坐して）…」〔御門祭〕のような表現があり、同様のことを想定させる。その場の必要に応じて数種の動詞を重ね、それによって事態・心情を詳細に描写するということが、韻文と散文を問わず行われたようである。言うまでもなく、数種の動詞が続いた表現をよく見ると、慣例によって意味的に結びついている部分とそうでない部分とがある。しかし、目に見える現象としては、多種の動詞の連用形がいくつか重なっているだけである。

上代の歌では、「大坂に阿布夜袁登売袁（逢ふやをとめを）道問へば…」〔記七七〕の「や」、「今生なる間は楽乎有名（楽しくをあらな）」〔三・三四九〕の「を」などのように、間投助詞が多用されている。この現象は、動詞間の意味的な結びつきだけでなく、文節間の意味的関係について考察する際にも、忘れてならないものである。

本稿の副題に、「複合動詞」ではなく「動詞連接」という表現を用いた。それは、重なった複数の動詞について想定される、右に述べたような緩い意味的関係を考慮してのことである。また、右の論述のなかで、「二種の動詞の間に助詞を挿入する」という一般的な表現を用いずに、「動詞間に助詞が位置する」と表現した。それもまた、現象そのものを客観的に描写するためである。「挿入する」という表現は、密接に結びついたものの間に何かを割り込ませる、というニュアンスを含みがちだからである。

右に列挙した動詞連接の様態や、動詞間に位置する助詞の用法などについては、多数の実例を細かく調査・考察して、前稿でその結果を具体的に報告した。[2] 現在のところ、前稿に付け加えるべきことはあまりない。

本稿で新たに考察しようとするのは、複数の動詞の連接した形式が示す、前後にある語や前後の文脈との意味的な関係であり、また連接した動詞相互の意味関係である。さらに、それらの意味関係のありかたが、上代語とそれ以降の言語ではある程度まで異なっていたことを確認したうえで、その背景にあったはずの歴史的な意義について考えることも、本稿の目的の一つである。

二

まず、歌に用いられた動詞連接が、前後の語や文脈とどのような意味関係をもつのかを、具体的に検討してみる。

1　行き沿ふ　川の神も　大御食に　仕へ奉ると　上つ瀬に　鵜川を立ち　下つ瀬に　小網刺渡　山川も　依りて
　仕ふる　神の御代かも　〔一・三八〕

2　真木積む　泉の川の　速き瀬を　竿刺渡　ちはやぶる　宇治の渡りの　激つ瀬を　見つつ渡りて…
　〔十三・三二四〇〕

どちらも長歌の一部である。1の「下つ瀬に小網差し渡す」と2の「速き瀬を棹差し渡り」とは、川を渡るという状況と具体的な言いまわしとの二点で、互いによく似ている。1の「差し渡す」も2の「差し渡り」も、『萬葉集』の索引や辞書で一まとまりの語句として扱われている。

1の「下つ瀬に」は、連用修飾成分として次句の「小網差し渡す」に掛かる。「小網」とは魚をすくい捕るための簡易な網であり、「差し渡す」はそれを広く一面に張ることをいう。その「差し渡す」という動詞連接に応じる目的語が「小網」であることは、一見して明らかである。「下つ瀬に小網差し渡す」という二つの句の構文は、次に示すように比較的単純なものである【右側の太線は一般的な理解に基づく承接関係を示し、左側の二重線は厳密な承接関係を示す】。

1　下つ瀬に　小網　差し渡す

一方、2の「速き瀬を棹差し渡り」という二つの句は、「（流れの）速い瀬を、棹を差して渡り」の意である。「速き瀬を」という句が、連用修飾成分として次句の「棹差し渡り」に掛かることは明瞭である。また、次句に含まれる「差し渡り」は、一つ句のなかに収まったかたちの動詞連接である。

2の文脈を細部にこだわって見てみると、実際の構文はそれなりに複雑なものになっている。「速き瀬を」は、意味的に後項の「渡り」だけに掛かり、前項の「差し」には掛からない。「差し」に直接に応じるのは、「棹」という目的語である。つまり、「速き瀬を棹差し渡り」という二つの句は、具体的には「速き瀬を―渡り」「棹―差し」という二重の意味関係を構成しているわけである。(3)

2　速き瀬を　棹　差し　渡り…

このように、動詞が連接した2の「差し渡り」では、1の「差し渡す」とは異なって、前項と後項とがそれぞれ別の語句に応じている。「差し渡る」はほかに用例がなく、歌の作者が文脈に合わせて臨時に構成した連接だろうと考えられる。

現代語では、複合動詞として「差し渡る」「差し渡す」を使うことは、一般にはないようである。ただし、連用形名詞の「差し渡し」ならば、現代語だけを収める国語辞典にも立項されているように、ある点から別の点までの長さを意味する複合語として使うことがある。

今度は、次の二首の表現を検討してみる。

3　いや遠に　国を来離れ　いや高に　山乎故要須疑　葦が散る　難波に来居て…　〔二十・四三九八〕

4　白雲の　たなびく山を　岩根踏み　古要敝奈利奈婆　恋しけく　日の長けむそ…　〔十七・四〇〇六〕

これらも、長歌の途中に見える部分である。また、どちらにも、旅人が山を越えて行くという場面が詠み込まれている。

二首の表現のうち、3の「山を越え過ぎ」と4の「越え隔りなば」には、「越え過ぎ」「越え隔り」という、ともに「越え」を前項とする動詞連接が含まれている。『萬葉集』の索引のなかに、これらの「越え過ぎ」「越え隔り」を一つのまとまった語句として立項しているものがある。

3の「山を越え過ぎ」という句を見てみる。この句の直前に位置する「いや高に」が、連用修飾成分としてこの句に掛かることは、改めて言うまでもない。そして、これも言うまでもないことだが、動詞の連接した「越え過ぎ」に応じる目的語は、同じ句の初めに位置する「山」である。別の言いかたをすれば、「国を来離れ」た人物が「越え」る対象も「過ぎ」る対象も、同じく「山」である。

3の当該部分の構文は、1の「下つ瀬に小網差し渡し」と同様に比較的単純なものである。

3　いや高に　山を　越え過ぎ…

これに対して、4の表現では動詞連接の用法がかなり複雑なものになっている。その構文の様態を把握するためには、「…山を岩根踏み越え隔りなば」という、二つの句を越えるやや長い部分を対象にしなければならない。

粗雑な言いかたをすれば、4の「白雲のたなびく山を」という二つの句は「岩根踏み越え」に掛かる。しかし、意味的な呼応関係を細かく分析すれば、「白雲のたなびく山を」は、「岩根踏み」を飛び越えたさきの「越え」だけに掛かる。その「…山を—越え」という目的語と動詞との関係は、「白雲のたなびく山を超而来二家里」〔三・二八七〕や「白雲のたなびく山を今日香越濫」〔九・一六八一〕などの、類似する表現を見ればよくわかる。

「…山を」と「越え」との間にある「岩根踏み」という句は、「越え」の具体的な方法・状況を描写するために挿入したものである。そして、この句のなかでは、「岩根」が「踏み」に応じる目的語になっている。「伊波祢布牟生駒の山を…」〔十五・三五九〇〕や「岩根踏重なる山は…」〔十一・二四二二〕その他の類例があり、山を越えることは「岩根を踏む」というイメージを伴っていたようである。

現代語には、「踏み越える」という複合動詞がある。そのために、現代人が4の「岩根踏み越え」という表現を読めば、それは「岩根—踏み越え」という意味関係にあると理解しがちである。しかし、4の実際の文脈では、「岩根」に応じるのは前項の「踏み」だけである。「踏み」に続く次句の「越え」は、右で見たように「岩根踏み」の前にある「…山を」を承ける。

では、4の「越え隔り」という動詞連接のうち、前項の「越え」を除いた後項の「隔り」は、意味的にどの語に応じるものなのか。実は、「隔り」が応じるものは歌句に詠み込まれておらず、あえて言えば、文脈が示唆する「私が君と／私と君の二人が」という意味の表現に応じている。つまり、「越え隔り」は一句のなかに収まった動詞連接ではあるが、「…山を—越え」「(私が君と)—隔り」というかたちで、それぞれの動詞が意味的に別の語句に分属しているのである。「越え隔る」もほかに用例がなく、文脈に応じて臨時に二種の動詞を組み合わせたものだと考えられる。

「愛し妹は隔有鴨」〔十一・二四二〇〕という例があるように、「隔り」は「(二人が)遠く離れ／離れ離れになり」

の意である。歌句には詠み込まれておらず、文脈から推測される「私が君と／私と君の二人が」という意味の表現は、あえて言えば「隔り」の主語だということになる。

4の表現の構文・意味関係を図式化して示すことは、なかなか困難である。あえて単純化して示すとすれば、ほぼ次のようになるだろう。

4　白雲の　たなびく山を　岩根　踏み　越え　（私が君と）　隔りなば…

ただし、山を越えることによって作者が相手と遠く離れる結果になるわけだから、「…山を岩根踏み越え」と「隔りなば」とは文脈的にまったく無関係だというのではない。右のように、文脈は「…山を踏み越え」のところでひとまず中止法的に切れ、以下に「…ば」という仮定条件句が続く、と理解することができる。

ここで、3の表現に戻って、構文について再び考えてみる。3の「山を越え過ぎ」の場合、右にも述べたように、「越え」の対象も「過ぎ」の対象も、同じく「山」である。

現代語では、特定の地を越えて行くことを、3のように「越え過ぎる」と表現することが、一般的にはないようである。それでも、3の「…山を越え過ぎ」の意味は、現代人にはただちに理解できる。現代語の複合動詞では、原則として、それぞれの動詞が意味的により強く結びついているために、複合動詞は一つの目的語しかとることができない。だから、それと同じ構文をもつ3の「…山を越え過ぎ」は、現代人には理解しやすいのである。

「越え過ぎる」によく似た「通り過ぎる」は、現代語だけを収める国語辞典の類にも立項されており、また「踏み越える」も同様である。これらの複合動詞を構成する二種の動詞は、現代語では意味的に別の語句に分属することが

ないから、複合動詞に応じる目的語は一つだけである。国語辞典の類には、「踏み越える」の用例として「国境を踏み越える」という文をあげているものがあり、「踏み越える」の目的語は「国境」である。

さきにも述べたように、上代語では、連接した動詞の結びつきが全体的に緩かったと考えられている。結びつきが緩かったからこそ、2の「差し渡り」や4の「越え隔り」の用法に端的に表れているように、前項としての動詞Aと後項としての動詞Bとが、文脈に応じて別の語句に応じえたのである。上代語には「複合動詞」と呼びうるものはまだなかっただろう、という従来の推測は十分に首肯できるものである。

三

続いて、「佐欲姫伝説」にかかわる歌の表現を、以上と同じ視点に立って見てみる。松浦の佐欲姫と大伴佐提比古とが結婚したが、やがて夫の公務のために二人は別れてしまった、という内容のこの伝説は、当時の人々に広く知られていた。

のちの人々は、この伝説を題材にして歌を詠んでおり、数首の歌が『萬葉集』に収められている。次の歌は、その歌群に含まれる一首である。

5　行く船を　布利等騰尾可祢　いかばかり　恋しくありけむ　松浦佐欲姫　〔五・八七五〕

二人が別れた時の、佐欲姫のつらい心情を作者が想像して詠んだものである。伝説によると、佐欲姫は山の上に立

ち、佐提比古の乗った船に向かって必死に「領巾（ひれ）」を振ったという。

「領巾」は「褶」「比礼」とも書き、女性が肩に懸けて下に垂らす布のことである。それには霊妙な呪力が具わっている、と信じられた。「領巾」を振ることによってその呪力が発動し、死者さえも蘇らせるのだという記述が、複数の古い文献に見える。(4)

5の第二句である「振り留（とど）みかね」は、呪力の籠もる「領巾」を佐欲姫が振っても、遠く離れて行く船を留めることができなかったことをさす。5の直前に置かれた、

6　海原の　沖行く船を　帰れとか　領巾振らしけむ　松浦佐欲姫　〔五・八七四〕

という歌も、作者が佐欲姫の心情を想像して詠んだものである。5の歌と並べて読むことによって、二人が別れた時の状況がどのようなものだと考えられたかが、より具体的にわかる。

5の「振り留み」は一句のなかで動詞が連接したものであり、句末の「…かね」は補助動詞である。『萬葉集』の索引には、この「振り留みかね」も一まとまりの語句として立項してある。

第一句の「行く船を」は連用修飾成分として次句の「振り留みかね」に掛かる、と一般的には言える。しかし、歌の文脈をよく見ると、実際に「行く船を」は「留みかね」に掛かるのであり、「振り」には掛からない。「振り」の目的語は、文脈から見て、歌句には詠み込まれていない「領巾」である。だから、ここは、「行く船を—留みかね」「（領巾を）—振り」という二重の呼応関係にある。動詞連接の前項である「振り」と、その後項である「留み」とが、意味の面で別の語句に応じているのである。

5　行く船を　（領巾を）　振り　留みかね…

この意味関係のありかたは、2の「速き瀬を棹差し渡り」のそれに類似する。しかし、2の「棹」にあたる目的語の「領巾」が5には詠み込まれていない点で、両者は異なる。「留み」の目的語である「領巾」は、人々がよく知っている伝説の内容と、直前に置かれた6の歌の表現とに依存するかたちになっている。伝説の内容を知らず、また6の歌も読まなかったとしたら、「振り留み」の、特に「振り」を用いた理由が理解できなかったに違いない。動詞連接の「振り留み」も、伝説の内容に応じて臨時に組み合わせたものだろう。

次の歌の表現や構文はどうか。

7　朝狩に　鹿猪踏み起こし　夕狩に　鶉雉踏み立て　大御馬の　口抑へとめ　御心を　見為明之　活道山…

〔三・四七八〕

この長歌に見える「御心を見し明らめし」の「見し明らめ」も、一つの句のなかに収まった動詞連接であり、やはり索引ではこれを一まとまりの語句として立項している。しかし、「御心を安吉良米多麻比（明らめ給ひ）…」〔十八・四〇九四〕その他の例があるように、7の「御心を」は、「見し明らめ」の後項である「明らめ」だけに掛かる。また、「我が大君の見給吉野の宮は…」〔六・一〇〇五〕や「国状を見之賜而…」〔六・九七一〕などでも明瞭なように、前項の「見し」の目的語は国土の状況・景観である。7の場合の目的語は、文脈から推測して「活道山」及び

そこでの行為である。7に添えられた反歌に「見しし活道の…」〔三・四七九〕とあり、そのことには疑問の余地がない。「御心を、（活道山やそこでの狩の様子を）御覧になり、晴らされ」たということである。だから、「見し明らめ」という動詞連接は、意味の面で「御心を―明らめ」「（活道山やそこでの狩の様子を）―見し」という分属関係にある。

7　御心を　（活道山やそこでの狩の様子を）　見し　明らめ…

「見し」の目的語が文脈から推測されるものである点で、意味的な分属関係は、4の「（私が君と）隔りなば」や5の「（領巾を）振り留みかね」に酷似している。(5)

次の歌の連接動詞は、以上の諸例とはまた異なる分属関係を示す。

8　大伴の　高師（たかし）の浜の　松が根を　枕宿杼（まくらきねど）　家し偲（しの）はゆ　〔一・六六〕

第三句と第四句の「松が根を枕き寝（まくらぬ）れど」は、旅の途上にある作者が、自分の置かれた状況について描写したものである。「松が根を」は連用修飾成分として「枕き寝れど」に掛かる、というのが一般的な理解である。この「枕き寝」もまた、索引では一まとまりの語句として扱われている。

「枕き」は、名詞の「枕」に活用語尾を付して動詞に仕立てたものであり、ほかに『萬葉集』に四つの例がある。また、本文の「枕宿杼」には、古くは「枕に寝れど」という別訓もあったが、現在では「枕き寝れど」と訓じられて

いる。

その「枕き寝れ」は動詞の連接したものであり、一つの句のなかに収まっている。そして、「枕き」も「寝れ」も、ともに作者の行為を表す語である。しかし、前項の「枕き」に意味的に掛かるのは、直前にある目的語の「松が根を」である。また、後項の「寝れ」は「松が根を」を承けるのではなく、「寝れど、（眠られずに）家し偲はゆ」というような意味関係で以下に続く、と見るべきものである。後項の「寝れど」は、「家し偲はゆ」を導入する逆接条件句になっている。

8　松が根を　枕き　寝れど　家し偲はゆ

「枕き」と「寝れ」とは、やはり意味的に分属関係にあるのだが、その分属のありかたはこれまで見てきた諸例とは異なる。

ほかに四例ある「枕く」は単独で用いられており、「枕き寝れど」のように別の動詞と連接したものは8の例に限られる。8の「枕き寝れ」もまた、臨時に構成した連接だろう。

以上で取り上げたような、連接した動詞のそれぞれが意味的に別の語に応じる例は、『萬葉集』に数十ある。以前、5の「行く船を振り留みかね」や「声の嗄るがに来喧響目（きなきとよめ）（来鳴き響めめ）」〔十・一九五一〕などの数例について、連接した動詞の意味関係を問題にし、具体的に検討を加えたことがある。(6)

中古の歌になると、以上で検討したような意味的な分属の例は、ほとんど見られなくなる。一一〇〇首を収載する『古今和歌集』の歌句にもほとんど例がないが、同集であえて似た例を探すと、

9　垂れこめて　春の行方も　知らぬ間に　待ちし桜も　移ろひにけり　〔二一・八〇〕

10　抜き乱る　人こそあるらし　白玉の　間無くも散るか　袖の狭きに　〔十七・九二三〕

のようなものが見つかる。

9の歌の詞書に、

心地そこなひて患ひける時に、風にあたらじとて下ろしこめてのみ侍りし間に、折れる桜の散りがたになれりけるを見て詠める。

とある。第一句の「垂れこめ」は、中古の文献に見える同句の用例のうちで最も古いものである。二種の他動詞が連接しており、「簾や蔀などを垂らし、部屋に籠もり」といった状況を表す。だから、動詞連接の語構成に戻って説明すれば、「垂れ」の目的語は簾や蔀などだということになる。また、「籠め」は「身を室内に籠もらせて」の意だとも解説されているように、その目的語は作者自身である。

どちらの目的語も、歌には詠み込まれていない。しかし、「垂れ」「こめ」の目的語が何であるかは、詞書に「風にあたらじとて下ろしこめてのみ侍りし間に…」とあって、文脈上きわめて明瞭である。「垂れこめて」と表現するだけで、人々にはただちに状況が推測できたに違いない。

10の歌は、瀧から水の玉が絶えず飛び散っている光景について、「多数の玉を貫く緒を、誰かが抜き取ったらしい」

と擬装的に推定したものである。第一句の「抜き乱る」は、二種の他動詞から成る連接であり、「人」に掛かる連体修飾成分である。

この場合も語構成の面から細かく分析すれば、「抜き」と「乱る」とがとるはずの目的語はそれぞれ別である。ここは、「（緒を）抜き（玉を）乱る」という意味関係にある。歌の「白玉の間無くも散るか」という表現によって、「抜き乱る」が伴うはずの二種の目的語が何であるかは、その場で理解できたはずである。あるいは、9の「垂れこめて」でも10の「抜き乱る」でも、目的語をあえて詠み込まずに、文脈でそれを示唆し推測させるというのが、これらの歌の技法だったのかも知れない。動詞連接の前項と後項がとる目的語を二つとも文脈から推測させる、という表現のありかたは、『萬葉集』の歌には見られないものである。

連接した動詞のそれぞれが別の歌句に応じていると見なしうる例は、『古今和歌集』では9と10に類似するタイプのものしかない。それだけでなく、動詞に応ずべき語句を文脈から推測させるという、9と10の類例もまた数が僅少である。動詞連接が一句に収まっており、それぞれの動詞が、前後にある別の語に応じるといった、上代のような構文の実例はまずない。

上代から中古にかけてそのような変化を来した理由の一つとして、中古になると、連接した動詞の結びつきが上代よりもやや強くなり、意味的な分属関係を構成しにくくなったことがあるだろう。それを逆の面から言えば、連接した動詞がそれぞれ別の歌句に分属しない場合にのみ、動詞連接を用いるようになりつつあった、ということになる。

四

右に引き続き、上代語の動詞連接と中古語のそれとについて、両者の共通点・相違点を見てみることにする。

さきに、数種の連用形が連接した上代語の例として、歌の「打ち嘆き萎えうらぶれ偲ひつつ…」や散文の「待ち防ぎ掃ひ却り言ひ排け坐して…」などの表現を引用した。そして、多種の連用形を用いて状況を詳細に描写したこれらの表現でもまた、かつて指摘されたように、連接した動詞は互いに緩い意味関係にあったのだろう、と述べた。

『萬葉集』の歌には、一句のなかで四種の動詞が連接したものも、数は多くないが実際に例がある。それらのなかから補助動詞を含んで四語となったものを除外すると、次の四例が残る。

11　馬並めて　打集越来　今見つる　吉野の川を　いつかへり見む　〔九・一七二〇〕

12　よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　磯は無くとも　沖つ波　諍榜入来　海人の釣舟　〔十三・三二二五〕

13　英遠の浦に　寄する白波　いや増しに　多知之伎与世久　東風をいたみかも　〔十八・四〇九三〕

14　大君の　任けのまにまに　島守に　我が立ち来れば　ははそ葉の　母の命は　み裳の裾　都美安気可伎奈涅　ちちの実の　父の命は…　〔二十・四四〇八〕

短歌に見えるものと長歌に見えるものとが、それぞれ二例ずつである。特定の歌型に限定されない連接だったことがわかるが、多くの句から成る長歌の方が、物理的に数種の動詞連接を構成しやすかったこともまた事実だろう。現に、さきにあげた「打ち嘆き…」「飛び翔り…」などの歌の例は、どちらも長歌に見える表現である。

「打ち群れ越え来」「諍ぎ漕ぎ入来」「立ち頻き寄せ来」「摘み上げ掻き撫で」には、一音節だけの「来」が句末に位置するものが三例まである。それらはこの動詞の連用形・命令形・終止形の三種を含むものであり、二音節から成る

連体形・已然形は含まれていない。また、字余りの現象と深いかかわりのある、母音だけの音節を句中に含むものが二例ある。七音句という枠のなかで四種の動詞を連接させるには、用いる動詞にそれなりの音韻的な条件が必要だったらしい。

四例のうち、11の「打ち群れ越え来」と、13の「立ち頻き寄せ来」と、14の「摘み上げ掻き撫で」の三例は、当時よく使われていた動詞連接を応用したものだと考えられる。11の連接は、「打ち群れ」と「越え来」を重ねたものであり、ほかには「打ち群る」が一例、「越え来」が十七例ある。13の連接の場合、ほかに「立ち頻く」が一例(7)、「寄せ来」は十三例ある。14の連接の場合、ほかに「摘み上ぐ」の例はないが、「掻き撫づ」は五例ある。

残る12の「凌ぎ漕ぎ入来」は、「（波を）乗り越え漕いで入って来い」の意である。この句では、本文の「諍」に「浄」の異文があり、また「諍」にも「しのぎ」「いそひ」「きほひ」の三種の訓がある。右にあげたのは、最も多くの注釈に採用されている「諍（しのぎ）」である。その「諍ぎ漕ぎ入来（りこ）」は、「漕ぎ」と「入り」とが連接した部分に母音の融合が起こった、と想定した表記である。それを想定しない「諍ぎ漕ぎ入り来」という表記も、十分に可能である。

この四語の連接について調べてみると、「諍ぎ漕ぐ」「漕ぎ入る」「入り来」のどの連接もほかに例がなく、『古事記』『日本書紀』の歌にも例が見えない。既存の表現を応用することなく、歌の文脈に合わせて四語を臨時に連接させたものだろう。

『古今和歌集』の歌には、一句のなかで四種の動詞が連接した例は一つもない。そのことは、同集に収載された歌の数から見ても、特に問題視すべきことでもない。三種の動詞が連接したものならば、「散り交（か）ひ曇れ」〔七・三四九〕、「振り放け見れば」〔九・四〇六〕、「生ひ出で来る」〔十一・四七八〕、「相（あ）ひ見初（そ）め」〔十三・六五〇〕、「見なれ初め」〔十五・七四九〕の、五つのバラエティーがある。これらのうち、「振り放け見れば」「相ひ見初め」の二種は

上代の表現を継承したものである。

『古今和歌集』の五つのバラエティーに対し、『萬葉集』には三語の連接に七十余のバラエティーがあって、圧倒的に数が多い。『萬葉集』の歌数は『古今和歌集』のほぼ四倍あるから、単純に計算すると、『萬葉集』に二十ほどのバラエティーがあれば、比率としては同等になる。だから、その三倍を超える七十余という数は、上代の歌では動詞の連接が頻繁に行われたことを端的に物語る。

『古事記』に一一二首、『日本書紀』に一二八首ある歌謡を見ると、三種の動詞が連接したものの数は、それぞれ六例と七例である。計十三例のうち、両書に共通するものが三例ある。六例と七例のどちらも『古今和歌集』の例数を超えており、やはり上代語では動詞連接が活発だったことを、そのまま反映するものだと言える。

試みに、『萬葉集』に出ている七十余のバラエティーのうち、動詞連接が「来」で始まるものを見てみると、「来立ち呼ばふ」「来立ち鳴く」「来立ち嘆く」「来鳴き翔(かけ)らふ」「来鳴き初む」「来鳴き響(とよ)もす」「来鳴き響む」「来鳴き渡る」「来経行く」の、計九種がある。そのうち、「来鳴き…」が五例、「来立ち…」が三例ある。また、「出づ」で始まるものには、「出で立ち見る」「出で立ち向かふ」「出で立ち行く」「出で立ちかつ」「出で立ち聞く」「出で立ち平(な)らす」の六例があり、すべてが「出で立ち…」の型に属する。同じ動詞で始まる連接に、特定の型ができあがっていたわけである。連接がどこまでも自由かつ臨機応変に行われたというのではなく、連接のありかたにはある程度の固定化が進んでいたのである。

『萬葉集』に見える動詞連接のなかには、11〜14の動詞連接にもその傾向がはっきり出ているように、動作を行った順序のとおりに動詞を重ねた、と判断されるものが少なくない。三語の連接したものを見てみると、たとえば「斎瓮(いはひべ)を忌穿居(いはひほりすゑ)（斎ひ掘り据ゑ）…」〔三・三七九〕は、「（神に酒を供える）神聖な器を、慎んで土を掘って据え」

の意であり、動作の順序に動詞が重ねられている。つまり、神に事の実現を祈るために、身を清め、土を掘り、そこに「斎瓮」を据える、という動作である。一連の動作の順に三種の動詞を重ねたものだから、どの動詞も意味的に独立性が強かっただろう。しかし、索引には三語を一まとまりの語句として立項してある。同じ動詞連接がほかに二例見える一方、動詞が一つだけの「幸くあれと伊波比倍須恵都（斎瓮据ゑつ）」という例もある。

また、「足結出所沾（足結ひ出で濡れぬ）この川の瀬に」〔七・一一一〇〕の「足結ひ」は、動きやすいように袴の膝の下を紐で結ぶことであり、「足結ふ」の連用形である。紐を結んだうえで出掛けて行き、結局は川で濡れてしまったという。これも、三種の行為を順に描写した表現である。「斎ひ掘り据ゑ」の場合と同様に、それぞれの動詞は意味の面で独立性が強かっただろう。

『古今和歌集』の場合は、一句のなかで三種の動詞の連接したものが既出の五種しかなく、そのなかで動作・行為の順に動詞を重ねたと言えるものは、上代から引き継いだ「振り放け見れば」ぐらいだろう。「桜花」に呼びかけた「散り交ひ曇れ」の場合は、「散り交ひ」のあとに曇るという状況が実現するとも言えるし、桜の花が散り乱れると同時にその辺りが曇ることになるとも言える。だから、動詞の順序のとおりに事態が生じる、と断定することはできない。

二語が連接した「脱ぎ懸く」「行き止まる」など、動作の順序をそのまま反映するものは、『古今和歌集』に少数ながらある。しかし、「思ひ乱る」「恋ひわぶ」「立ち別る」「吹き返す」「降りそぼつ」その他、よく用いられる動詞連接では、どちらの動作が先だと言えないものである。

五

これまで正面から論じられたことがないようだが、上代の歌の表現をよく見ると、互いに反義語の関係にある二種の動詞が同じ句のなかで連接する、という場合のあることがわかる。やはり、動詞間の意味関係が全体的に緩いものだったからこそ、そうした連接が可能だったのだろう、と推定される。『萬葉集』から例をあげる。

15　梅の花　佐伎知流曽能尓　吾行かむ　君が使ひを　片待ちがてら　〔十八・四〇四一〕

16　天雲の　去還奈牟　もの故に　思ひそ我がする　別れ悲しみ　〔十九・四二四二〕

17　葦屋の　宇奈比処女の　奥つ城を　往来跡見者　音のみし泣かゆ　〔九・一八一〇〕

18　たまきはる　命絶えぬれ　立ち躍り　足すり叫び　伏仰　胸打ち嘆き…　〔五・九〇四〕

19　沖つ島　荒磯の玉藻　潮干満　い隠り行かば　思ほえむかも　〔六・九一八〕

20　万代に　得之波岐布得母　梅の花　絶ゆることなく　咲き渡るべし　〔五・八三〇〕

「咲き散る」「行き帰り／行き来」「伏し仰ぎ」「干満ち」「来経」のどれも、反義語どうしの組み合わせだと判断して間違いはないだろう。[8]『延喜式』の祝詞にも、「参入罷出（参入り罷り出づる）人の名を問ひ知らし…」〔御門祭〕という例がある。連接動詞の後項の活用形を見ると、それらは連体形・連用形・終止形などさまざまである。

現代語では、このような連接を動詞として活用させることが、通常は不可能である。たとえば、「さまざまな花が、

今年もこの庭で咲き散った」「頻繁に故郷に行き帰るのは、ひどく疲れる」などは、現代語の文として不自然なものである。連接した動詞は、組み合わせによっても程度は異なるが、意味的により強く結びついているのが普通である。だから、反義語をそのまま連接させると、両語の間に意味上の矛盾・齟齬が生じるのである。[9] あえて反義語どうしの連接を構成した場合には、現代人にとって奇妙で無理な言いまわしだと感じられるのが普通である。時には、そこまではいかなくても、文学的な表現や詩的な修辞のように感じられる。

しかし、「咲いて散る」「行って帰る／行って来る」のように、反義語が接続助詞を挟むかたちにすれば、現代語でも活用させて使うことが可能である。「て」がある場合には、前にくる動詞の表す動作・作用と、あとにくる動詞の表す動作・作用との間に、それなりの時間差を読み取ることになるからである。[10] また、二種の動詞の連接を、「花が咲いたり散ったりする庭」「お互いの家に行ったり来たりした」のように、「……たり……たり…」という表現に仕立てることも可能である。この場合にも、二種の動作・作用の間に時間差を読み取ることになる。

さらに、「行き帰りによく立ち寄った／頻繁に行き来する」「潮には満ち干の変化がある」のように、反義語の連用形を名詞化し、両語を対比して使うことも可能である。「売り買い」「勝ち負け」「出入り」「上り下り」「乗り降り」など、名詞化して使うことができる現代語の例は多くある。[11] 連用形がひとたび名詞に転成すれば、それらは「上下」「裏表」「陰日向」「縦横」「右左」などとほぼ同種の組み合わせになるのである。

上代語で15〜20に見るような動詞連接が可能だったのは、右でも述べたように、動詞間の意味的な関係がかなり緩いものだったからだろう。15の「咲き散る」と同じ動詞の間に助詞が位置する、「開香将散」〔二・二三一〕のような例がある事実は、そのことを反映する。

また、動詞間の意味的な関係が緩かったからこそ、たとえば「伏し、仰ぎ…」「干、満ち…」「来、経行く」とでも

表示しうるようなかたちで、反義語の表す動作・作用の間に時間差を読み取ることになったのではないか。15〜20のどの動詞連接でも、前項が表す動作・作用が実現したのちに後項が表すそれらが実現するのは、きわめて当然のことである。短時間で実現できる、18の「伏し仰ぎ」という動作でも、二種の動作は厳密には同時に実現することができない。だから、そこに必然的に時間差を読み取ることになったのだろう。

「妹が門入出見川乃常滑に…」〔九・一六九五〕の「入出見川」では、「入り」が、「泉」の「いづ」と同音の「出づ」を導入するかたちになっている。こうした用法が可能だったのも、反義語を重ねた「入り出づ」が違和感を与えるようなものではなかったからだろう。

15〜20に見える動詞連接にきわめて近いものとして、反義語ではなく対照語とでも呼ぶべき二種の動詞が、やはり同じ句のなかで連接した例がある。

21　昼はも　日の尽　夜はも　夜の尽　臥居雖嘆　飽き足らぬかも　〔二・二〇四〕

22　かくしつつ　遊飲与　草木すら　春は生ひつつ　秋は散り行く　〔六・九九五〕

23　夜のほどろ　出でつつ来らく　度まねく　なれば我が胸　截焼如　〔四・七五五〕

「伏し居」「遊び飲み」「切り焼く」は、人間の実現しうるさまざまな動作・行為のうち、特に二種を選んで組み合わせた表現である。

ただし、「寝るにつけ起きるにつけ嘆くけれど」の意を表す21の「伏し居嘆けど」は、「伏し居」の二語と「嘆け」との組み合わせ、つまり三語の連接である。「伏し居嘆く」はほかにもう一例あり、それも「寝るにつけ起きるにつ

け嘆く」の意を表すと理解されている。「伏し」と「居」の二語は正反対の動作を表す、と言えなくもない。

22の「遊び飲みこそ」も、三語が連接したものである。「…こそ」は「…こす」の命令形であり、「…てほしい」の意を表す補助動詞的な語である。「遊び飲み」という連接では、「飲み」が「遊び」に含まれると考えるべきかも知れない。

23の「截焼」には、「切り焼く」のほかに「截ち焼く」の別訓もある。しかし、「切り」「截ち」のどちらであっても、「截」は物を切り、また物を裂く意を表す。この「切り焼く」は、身体を傷つける行為を精神的な状況に転じて用いたものである。ほかに身体に関して用いた実例があるように、「砕く」「裂く」「割る」その他の動詞を用いることも可能だったろう。

21～23の動詞連接もまた、現代語の複合動詞にはない組み合わせである。どれも、反義語どうしが連接した場合と同様に、「……たり……たり…」と口訳することができる。

『古事記』『日本書紀』には、

24　伊知遅島　美島に着き　鳰鳥の　迦豆伎伊岐豆岐　しなだゆふ　楽浪路を　すくすくと　吾が行ませばや…　〔記四二〕

25　稲蓆　川副柳　水行けば　儺弭企於己陀智　その根は失せず　〔紀八三〕

などの、反義語を連接させた例が見える。24の「鳰鳥の潜き息づき…」は、「鳰鳥が（水に）潜ったり、（水面に出て）息をしたりする、そのように息をして…」の意である。水鳥によく見られる、正反対の所作を組み合わせ、作者

自身の行為の比喩に仕立てたものである。

25の「水行けば靡き起き立ち…」は、「水が（流れて）行けば、（それに従って）靡いたり起き上がったりし（てはいるが）…」の意である。三種の動詞の連接は、反義語の「靡き」と「起き立ち」とを組み合わせて構成したものだろう。

中古の歌にも、同じような動詞連接の表現が見える。『古今和歌集』には、反義語どうしを組み合わせたものが五種ある。

26　梶にあたる　波のしづくを　春なれば　いかが咲き散る　花と見ざらむ　〔十・四五七〕

27　行き帰り　そらにのみして　ふることは　我が居る山の　風早みなり　〔十五・七八五〕

「咲き散る」「行き帰り」の二種は、既に『萬葉集』にあった。同集にないのは、

28　潜けども　波の中には　探られで　風吹くごとに　浮き沈む玉　〔十・四二七〕

29　手も触れで　月日経にける　白真弓　起き臥し夜は　いこそ寝られね　〔十二・六〇五〕

30　裁ち縫はぬ　衣着ぬ人も　無きものを　なに山姫の　布さらすらむ　〔十七・九二六〕

に見える「浮き沈む」「起き臥し」「裁ち縫はぬ」の三例である。28の「浮き沈む」と29の「起き臥し」は反義語の組み合わせだと見て間違いはないだろう。30の「裁つ」と「縫ふ」とは衣服を作る際に行う反対の行為だから、反義語

の組み合わせだと言えそうである。「裁ち縫はぬ衣」は「裁ちもせず縫いもせぬ衣」の意で、「ぬ」は意味的に二種の動詞を承ける。

『萬葉集』にない例が『古今和歌集』に見えることから、中古の歌でもこうした動詞連接を構成しえたことが明らかである。それぞれの動詞の結びつきが、全体的に上代語より強くなってはいても、この種の動詞連接を排除し回避しなければならないほどには、まだ結びつきが強くなっていなかったのである。(12)

六

上代語の動詞連接のありかたを確認すると、特定の歌の表現を、これまでとは別のかたちで理解すべきではないか、と考えられる場合が出てくる。

31　多知之奈布（たちしなふ）　君が姿を　忘れずは　世の限りにや　恋ひわたりなむ　〔二十・四四四一〕

この歌は、題詞に「上総国（かみつふさのくに）の朝集使大掾大原真人今城（おほはらのまひといまき）、京に向かふ時に、郡司が妻女等が餞（うまのはなむけ）する歌二首」とあるうちの第二首である。第二句の「君」とは、題詞に見える大原真人今城をさす。

上代語の研究者に広く知られているように、31の歌は、上代語の「…ずは」をどのように解釈すべきかという議論のなかで、たびたび取り上げられてきたものである。しかし、ここで改めて考えてみたいのは「…ずは」のことではなく、第一句の「立ちしなふ」という動詞連接のことである。

前項の「立つ」は、現代語でも使用頻度の高い動詞である。一方、後項の「しなふ」という動詞は、現代語には継承されていない。『萬葉集』から、「しなふ」とその連用形名詞である「しなひ」について、実際の用例をあげてみる。[13]

32　真木の葉の　之奈布勢能山　賞はずて　我が越え行けば　木の葉知りけむ　〔三・二九一〕
33　ゆくりなく　今も見が欲し　秋萩の　四搓二将有　妹が姿を　〔十・二二八四〕
34　我妹子を　聞き都賀野辺の　靡合歓木　我は忍びえず　間無くし思へば　〔十一・二七五二〕
35　春山の　四名比盛而　秋山の　色なつかしき　ももしきの　大宮人は…　〔十三・三二三四〕
36　人皆の　かく迷へれば　容艶　寄りてそ妹は　たはれてありける　〔九・一七三八〕

これらの例を見ると、「真木の葉」「秋萩」「合歓」などの植物の様子や、木々の茂り栄える「春山」の景観などを、讃美の思いを籠めて形容するのに「しなふ／しなひ」が用いられている。

しかし、問題の31では、「君が姿」を描写するのに「しなふ」が用いられている。おそらく、草木がしなやかにたわむ様子や、山の木々が繁茂する様子などの形容に用いるのが本来であり、のちに、人間の姿態のたおやかさや、動きのしなやかさなどを形容するのに転用されるようになった、ということだろう。その中間点にあると見えるのが、「秋萩のしなひ」を「妹が姿」の比喩とした33の表現である。古語辞典の類では、周知のように「しなふ」に「撓」「萎」などの字があてはめてある。

31の例と同じ「立ちしなふ」という動詞連接を、「菅」の様子を形容するのに用いた例が一つだけある。

37　浅葉野に　立神古　菅の根の　ねもころ誰が故　我が恋ひなくに　或本の歌に曰く「誰葉野に　立志奈比垂」

〔十二・二八六三〕

第二句の「立ち神さぶる」は、「古びた感じで立つ」の意である。歌末には、その第二句の別伝として、31の第一句と同じ語構成の「立ちしなひ」が添えてある。

本伝の「立神古」に用いられている「古」は、語尾の「…ぶる」にあてた借訓字だが、語義との対応を意識したうえでの用字である。また、別伝の末尾の「…たる」は助動詞だが、こちらの借訓字の「垂」も、「菅」の豊かな枝葉や穂がたわみ、下に垂れた光景を意識したうえでの用字だろう。

以上の数例が、上代の文献に見える、「しなふ／しなひ」の全例である。31の「立ちしなふ君が姿」を、「しなやかに美しいあなたの姿」「たおやかなあなたのお姿」などと口訳する注釈が多く、動詞連接の前項である「立ち」は結果的に無視されている。「立ち」は接頭辞として軽く添えたものだと解説する注釈もあるように、31では本来の語義が保持されていないと見たわけである。

なかには、「しなやかに立つあなたの姿」という口訳を付している注釈も、僅少ながら実際にある。「立ち」の語義をそのまま活かすかたちの口訳である。「立ちしなふ」を、「しなやかに立つ」の意だと解説している辞書が少なからずあり、注釈ではその解説を踏襲したものと思われる。

しかし、これの「しなやかに」と「立つ」との関係は、なかなか理解しにくい。人間の所作について「立つ」と表現するのはごく普通であり、背筋を伸ばしてすくっと立つ姿は、見るがわによい印象を与えるだろう。しかし、その様子を現代語で「しなやかに」と形容しては、どこか矛盾・齟齬を生じることにならないか。その点で、「立ちしな

ふ君が姿」とはどのような「姿」なのかが、具体的に把握できないのである。「しなやかに立つ」という辞書の解説を採用する注釈が僅少なのは、その現代語の表現に不自然さを感じた結果だろう。動詞の組み合わせに違和感をいだけば、結果として「立ち」の語義を無視するしかないのである。

37の別伝である「立ちしなひたる菅」の場合、まっすぐに立つ草木も風によっては靡いたり曲がったりするから、「しなやかに立つ」は表現として理解できなくもない。これに対して、人間が体をしなやかに曲げ動かして立つという状況を想定するのは、やはり不自然であり難しいことのように思われる。

人間について「立ち…」という動詞連接を用いた例は、『萬葉集』ではバラエティーがきわめて多い。「立ち隠る」「立ち聞く」「立ち来」「立ち候ふ」「立ち留まる」「立ち嘆く」「立ち平らす」「立ち濡る」「立ち走る」「立ち待つ」「立ち見る」「立ち向かふ」「立ち廻る」「立ち行く」「立ち別る」「立ち踊る」などだが、どの組み合わせにも意味的な矛盾・齟齬は特に認められない。しかも、これらの連接では、「立ち」の語義が濃厚なまま保持されている。31の「立ちしなふ」に対する従来の理解には、この動詞連接の表す所作が具体的に把握できていないことと、「立ち」の語義がほとんど残っていないと見るべきことの、二つの難点がつきまとうのである。(14)

それでは、一字一音で表記され、別訓の可能性が想定できない31の「立ちしなふ」は、どのように理解すればよいのか。ここで参考になるのは、15〜20の反義語の連接である。「立ちしなふ」もまた「……たり……たり…」と口訳できる、意味的な結びつきの緩い反義語の連接だと理解すれば、そこに矛盾・齟齬は生じないことになる。ことさらに説明を加えれば、「すくっと立ったり、しなやかに動いたりする、あなたのお姿」ということである。さきに引用した25の「靡き起き立ち」と比較して、人間と植物との相違はあるものの、両者の状況はよく似ている。

37の本伝の「立ち神さぶる菅」でも、「立ち」と「神さぶる」とは意味的な結びつきが緩いと考えてよいだろう。

同じ二種の動詞が逆の順序で連接した、

38　茂岡に　神佐備立而（かむさびたちて）　栄えたる　千代松の木の　年の知らなく　〔六八・九九〇〕

という歌の第二句がある。これの「茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木」と37の「浅葉野に立ち神さぶる菅」とは、類似する状況を描写した表現である。松と菅とが神々しさを具えて立つ光景が、一方では「立ち神さぶる」と描写され、他方では逆に「神さび立つ」と描写されているのは、二つの動詞の組み合わせに固定した順序がなかったからだろう。「立ち神さぶる」と「神さび立つ」とでは描写する光景に大きな相違があった、と二首の歌から読み取ることは困難である。二首の歌の作者がそれぞれ、二つの動詞をその場で臨時に組み合わせて光景を描写した、と想定されるのである。

七

かつて指摘された上代語の諸特徴のうちで顕著なものの一つは、本稿で扱ったようなこと、つまり、文を構成する語と語との意味的な関係が後世語のそれよりも緩かっただろう、ということである。そのように推定する主な根拠は、本稿の冒頭でも述べたように、上代語では二種の動詞が連接したもののほかに、同じ二種の動詞の間に係助詞その他の語が位置した実例がある、という現象である。動詞間の意味的な結びつきがより強くなっている現代語の複合動詞は、原則としてそれを許容しないのである。

連接した動詞の意味関係が緩かっただろうという指摘は、現在の研究者から見れば、半世紀も前になされたものであり、もはや資料を再検討して当否を検証するには及ばないものだ、と思われる。しかし、その指摘が妥当なものであるとすれば、同じ推定を導かざるをえない別の現象について、細かく分析し考察しておく必要がある。そう考えたことが、本稿の出発点である。

具体的な検証を行った対象は、一般に複合動詞として扱われ、辞書や索引にも一まとまりの語句として立項されている動詞連接である。動詞連接を構成する二種あるいは三種の動詞が、前後にあるそれぞれ別の語に意味の面で応じる、という分属の現象である。また、そのような分属に関連して、動詞連接を構成する複数の動詞が互いにどのような意味関係にあるか、ということも必然的に問題となる。本稿では、特にこの二点について、中古語の様態と比較しながら検討した。本稿の論述の過程でも推定したように、連接した動詞がそれぞれ別の語に応じえたことも、反義語どうしが動詞連接を構成しえたことも、二種の動詞の意味的な結びつきが緩かったことを反映するものだろう。(15)

現代語の複合動詞では、二種の動詞の意味的な結びつきが強くなっていることは確かであり、そのことを逆の面から言えば、意味的な結びつきが緩い上代語の動詞連接は、言語としてより古い段階を反映するものだ、ということになる。言語の進化・発達ということは安易に唱えるべきではないが、連接した動詞の結合度が強くなったということは、二つの動詞の意味的な一体化が進んだということだ、と理解してよいだろう。

言語のより古い段階と言えば、連接した動詞どうしの意味関係に近いものとして、連用修飾成分と被修飾成分との不整合の問題をあげることができる。具体的には、たとえば「地さへ裂けて―照る日」「袖さへ濡れて―刈れる玉藻そ」のような表現に見られる、自動詞と他動詞の不整合のことである。上代語では、連用修飾成分のなかに用いる動詞を、被修飾成分のなかに用いる動詞に合わせて調整する必要が必ずしもなかったのである。しかし、現代語でなら

ば、「地面まで裂いて…」「袖まで濡らして…」などと、他動詞を用いて表現するところである。

また、同一の動詞が構成する［Xすれども Xせず］という言いまわしや、同源に由来する別の動詞が構成する［Y_1せば Y_2せむか］という言いまわしも、言語の古い段階を反映するものだと言えるだろう。それは、たとえば「見れど見かねて…」「宿借らば……宿貸さむかも」のような表現に見られる、一見して意味的に矛盾するかと思われる言いまわしである。「見れど見かねて…」のような表現では、二つの「見る」が表す動作の段階、つまり一種のアスペクトに相違があり、一方は「見（ようとす）る」「借りようとする」の意を表し、他方は「（実際に対象を）見る」「（実際に宿を）貸す」の意を表すから、結果的に矛盾は生じないのである。一つの動詞が、意図を表す用法と動作を実現する用法との双方をもっていた、その古い段階での用法を継承したものだろう。現代語の動詞には意図を表す用法がないから、一般に許容されない用法である。

連用修飾成分と被修飾成分との意味的な関係や、［Xすれども Xせず］［Y_1せば Y_2せむか］という言いまわしなどについては、やや詳しく私見を述べたことがある。(16)

本稿で扱った、動詞にかかわる種々の表現は、ほとんどが歌に見えるものである。歌の資料は散文の資料に比べてはるかに多いという資料面での落差がある以上、それは必然的な結果である。ただし、『続日本紀』の宣命や『延喜式』の祝詞など、現存する散文の資料を見る限り、動詞連接のありかたは歌でのそれよりもかなり単純である。動詞連接を構成する前項と後項とが、それらの前後にある別の語に応じるという分属の現象はほとんどなく、単にいくつかの動詞が重なっているだけである。

その具体的な様相については、いずれ取り上げる機会があるはずである。今の段階で言えるのは、上代語という言語は、本稿で扱った種々の表現を許容するような、文を構成する各語がかなり緩い意味関係にある言語だった、とい

うことである。

注

（1）複合動詞にかかわる諸現象・諸問題を扱ったものに、関一雄『国語複合動詞の研究』（一九七七年、笠間書院）がある。同書では、従来の諸説を幅広く取りあげ、検討・批評を加えている。

（2）小著『上代日本語構文史論考』（二〇一六年、おうふう）の第Ⅰ部第三章。

（3）中古の文献には、棹を差して流れを渡るという同じ状況を、「棹」を用いずに単に「差し渡る」と表現した例が見える。「差し渡る」と言えば、「差し」の目的語は「棹」でしかありえないという理由で、「棹」を省略したことがもとなのではないか。あるいは、「差し」は「熊来を左之氐漕ぐ舟の…」（十七・四〇二七）に見える「差し」のように、「まっすぐに進み」「（目的地を）めざし」という意味のものだと理解したものか。

「海峡を漕ぎ渡るのに、ほぼ一時間かかった」というような文は、現代語で十分に可能なものだと思われる。この文の場合、厳密には「海峡を―渡る」「（舟を）―漕ぎ」という分属関係にある。しかし、「漕ぐ」と言った場合に、その目的語が「舟」であることはあまりにも自明である。『萬葉集』にも、「舟」を詠み込んでいない「粟島に許枳将渡と…」（七・一二〇七）のような例がある。目的語が何であるかが文脈から自然にわかる場合には、それを歌句のなかに詠み込まないことも古くからあったようである。

（4）このことに関する記述が見えるのは、『令集解』と『先代旧事本紀』である。二書に見える記述は、内容面でも表記面でもほぼ同じである。それによると、饒速日尊が天界から地上に天降ろうとした時に、天神がこの神に「鏡」「剣」「玉」「比礼」などの「天璽瑞宝十種」を授け、次のように教えたという。

もし痛む処あらば、茲の十宝をして一二三四五六七八九十と謂ひてふるへ。ゆらゆらとふるへ。かく為ば、死人も反生りなむ。

同様に、「比礼」つまり「領巾」を振ることによってその呪力を発揮させ、降りかかった苦難を逃れるという場面は、『古事記』の大穴牟遅神をめぐる神話にも出てくる。

（5）7の「鹿猪踏み起こし」「鶉雉踏み立て」に含まれる、「踏み起こし」「踏み立て」もまた、厳密に言えば、意味的に分属する動詞連接である。これらの動詞連接は「踏みこんで行って追い立てること」だと説明されているように、「踏み」の目的語は山野の地面・土地であり、「起こし」「立て」のそれは「鹿猪」「鶉雉」である。『萬葉集』に、「踏み起こし」は三例あり、狩に際して鹿あるいは猪を追い立てるのに用いられている。また、「踏み立て」は四例あり、鳥類を追い立てるのに用いられている。7の表現では、狩の様子を描写するにあたって、自明である「踏み」「立て」の目的語をわざわざ提示するには及ばなかったのだろう。

一方、同じ7には「大夫の心振起」という表現も見えるが、これの「振り起こし」の目的語は「大夫の心」だから、意味的な分属は認められない。

（6）小著『萬葉集構文論』〔二〇〇一年、勉成出版〕の第Ⅰ部第六章。

（7）「立ち頻く」の一例とは、「沖つ白波多知之久良思毛」〔十五・三六五四〕をさす。現在では、この例を「立ちし来らしも」の意だと解するのが一般的である。しかし、古い注釈及び現在の一部の注釈が採用する「立ち頻くらしも」が、構文面で妥当である。これについては、小著『萬葉集構文論』〔二〇〇一年、勉成出版〕の第Ⅰ部第六章、小著『上代日本語構文史論考』〔二〇一六年、おうふう〕の第Ⅰ部第三章で検討した。

（8）19の第三句の「潮干満」は、各語の文法的な関係が不明確である。ここでは、「潮が引いては満ち」の意、つまり「潮」が主語であり、「干満」は「干満つ」という動詞連接の連用形で述語になっていると解する。また、20の第四句の「来経」は、もとの語構成にさかのぼれば、「やって来、時が過ぎる」の意である。しかし、当該例では、反義語どうしを組み合わせたのとほぼ同義の、「やって来、去る」の意を表すものになっている。「年の経往者」〔十・二一四〇〕の「経行く」は、「過ぎ去る／行ってしまう」の意を表す。

（9）現代語にも、「仕事探しに明け暮れた」というような例外的な表現はある。ただし、これの「明け暮れた」は、「（夜が）明け、（日が）暮れた」という本来の具体的な意味から、「毎日を、そのことに没頭して過ごした」という二次的な意味に転化している。

（10）現代語の「咲いて散る」にあたるものとして、間に「て」の位置する「秋萩は開而落去寸（咲きて散りにき）」〔十・二二八九〕の例がある。また、「行って来る」にあたるものとして、「奈良の都に由吉帝己牟丹米（行きて来むため）」〔五・八〇六〕

をはじめとする数例がある。

(11) 反義語どうしを組み合わせ、その連用形を名詞化したものは、「生死之二つの海を厭はしみ…」〔十六・三八四九〕、「この照る月は満闕為家流」〔三・四四二〕など、既に上代にあった。『古今和歌集』にも、「立ち居のそらも思ほえなくに」〔十二・五八〇〕という例が見える。

(12) 中古の文献には、反義語どうしが連接した「出だし入る／出で入る」「後れ先だつ」「押し引く」「立ち居る」「下り上る／上り下る」「晴れ曇る」その他の例が散見する。しかし、中世以降の類例は少ないようである。

(13) 最後の36の「容艶」には、「かほよきに」「かほにほひ」などの別訓もある。

(14) 「大宮人ぞ立易奚流」〔六・一〇六一〕という例がある。この例の場合、人間の所作を表すのに用いた「立ち」の語義は、かなり希薄になっている。しかし、これは「立易月重なりて…」〔九・一七九四〕のような、時の変化を表す「立ち変はる」を「大宮人」が代替わりするのに転用した表現だろう。

(15) 連用形をめぐる種々の現象から見て、連用形の本来の用法は中止法にあったのではないかと推測することも、あるいは不可能ではないかも知れない。

(16) これら二点については、注（2）にあげた小著の第Ⅰ部第四章・同第六章で、具体的に例をあげて詳しく述べた。